

経営と健康



日本史を彩った女性たち 第十回

「武将の愛した女性たち」②

講談師 一龍斎貞花

戦後、「オレの愛人は5人だ」と豪語した政治家がありました。今なら大変毎日SNSで叩かれることでしょう。愛人を秘書にして給料をお手当にしている先生がいるとか、いないとか税金ですよ。これこそ叩かれるべき。

経営者の中にも奥方の目を盗んで会社の金で開いている社長さんありとも聞いていますが、以前は男の甲斐性などと云われましたが慎んでいただきたいですね。愛人を1号さん、2号さんともいわれましたが、豊臣秀吉の側室の順位、醍醐の花見の行列の序列で判ります。1番北の政所、2番淀殿、3番松の丸（淀君のいとこ、京極竜子）、4番三の丸殿（信長の娘）、5番加賀殿（前田利家の娘）、6番おまつ（利家の妻）

本妻が1番は判るが母親のまつより側室の娘が先。淀君と竜子が盃を受ける順番を争ったといわれ、竜子は北政所と親しく「私が先よ」「イエ私よ」年上のまつが中に入りその場を収めたとも、秀吉は笑って見ていたとも。いけませんね。

現実的好みの家康

今川家の人質の時元服し義元の姪、築山殿を押しつけられ、武田家に内通していると信長の命により築山と優秀な長男信康を殺せといわれ、抗うこと出来ず2人を処分。その後秀吉は妹旭を夫と別れさせ後妻に押し込み家康を取り込まんという計略。女性はどうでした。家康は2妻15妾といわれるが、

調べていくと22妾、子ども16人のはずが22人。容姿よりも子を産んでくれそうな女性を重視、後継者作りであるが、特筆すべきは太田道灌の孫お勝。女房に恵まれなかつた家康が私事を語り心の安らぎを求め、時には政務についても意見を求めたといわれ優れていたんでしょう。結婚させるんですが家康のことが忘れられず3か月で別れて家康の許へ。相思相愛であつたことが判ります。御家さんが7人、68歳の時には12歳のお梅を可愛がった。歳を取るとロリコンに。元氣の素の薬をつくり頑張りました。

後継者育成の妙、毛利元就

中国は大内氏と尼子氏の二大勢力が

鎬を削り、小豪族は昨日は大内、今日は尼子と生き残ることに必死。毛利とて同じ、愛した女性は判らぬが本妻、側室に9人の子をもうけ、次男元春が吉川家の養子となり熊谷信直の娘を妻に迎える時、この娘が大変な醜女、近臣が考え直すように進言、「そういう娘を妻にすれば親は感謝して毛利のため心から尽してくれるものだ」と答えて娶っている。三男隆景を小早川家に養子にやり、吉川、小早川を称して毛利の両川といわれ本家を支えた。四男以下いずれも妾腹の子だが他家へ養子に送り込み全部毛利の支城になり、養子をもらって娘として他家へ嫁がせる。本妻が生きている間側室を持たなかったというから苦勞を共にした妻を

愛していたんでしょう。子を多く持つのがいかに重要か、改めてわかり頂けたと思います。

明智光秀の娘玉が嫁いだ細川は、光秀の要請を断つて敵対しているが、元就の子ども達は一人として例はなく、元就の後継者育成が優れていたことが判ります。尤も細川が光秀に味方していたら家の存続はどうなっていたか。これを言う歴史家はありません。

最高の女性を娶った前田利家

信長の弓頭篠原主計の娘まつを妻にした利家。側室もいたんですが47歳まで2人は手を取り合つて寝ていたという。貴男方ご夫婦は如何ですか。

戦いの前、士気の上がらぬ兵のため、「これで一杯飲み、武器も買って下さい」とへそくりを出す。秀吉と柴田勝家が戦った時、利家は勝家の配下であり、秀吉とは青年時代からの友人、出陣するも病氣と称して加賀へ戻り秀吉と戦おうとせず。まづは秀吉のねね夫人と昔なじみ、勝家が負けた後、「昔のよしみで何卒宜しく」とお願い。秀吉も利家の恭順ぶりに加賀の国を与え

百二十万石。秀吉朝鮮出兵の折、利家も出陣して名護屋城（佐賀）へ。まづは「夫の留守を守らなければいけないし、もう歳ですからそなたが行つてお伽ぎを」と、若い側女を夫の許へ送り生れたのが名君三代利常。この利常の妻は、秀忠・お江の娘。わずか4歳で利常の妻として送られ、やがて家を継いだ利常が参勤交代で江戸へ。すると「パパ、ママ利常さんがいないので早く帰して」

4歳で送り出しただけに我が娘不憫さに一年江戸にいないといけないのを特別に途中で帰したといわれ、利常夫婦の仲の良さが判ります。

秀吉の命で夫と別れさせられ、秀忠の本妻となったのが秀吉の娘お江、淀君の妹の士気が強く側室を認めない。秀忠がこっそりお女中に手をつけ生まれたのが、四代家綱を補佐した名君保科正之。秀忠は生存中女房が恐くて親子の名乗りを上げなかったというほど。母お江が弟を可愛がり、お江が亡くなるや家光は、「わしにこんな素晴らしい弟がいたのか」と重用、正之は將軍の弟と威張らずあくまでも臣下として兄に仕えている。よく本妻の子と、側女

の子が争うことがあるが、秀忠は良きお女中に生ませたものです。

良妻に恵まれながら、

家臣の側女を奪った伊達政宗

政宗は、母親が従順な弟を可愛がります。信長・秀忠の母も同じです。子どもの時に疱瘡を患い独眼の政宗を嫌い毒殺を企てたほど。母の愛にうえる政宗の妻となったのが、三春城主田村清頭の一娘愛姫。12歳でいこの政宗に嫁いだものの、政宗暗殺事件に田村家からの関与があつたと疑われ、愛姫の乳母はじめお付きの侍女たち死罪となり、一時夫婦仲が悪くなったものの人質の形で京都の伊達屋敷に移つてからは夫婦仲は修復し、政宗との間に2代藩主となる忠宗はじめ4人の子をもうけている。

政宗に京都の情勢を報せ

「天下はいまだ定まつておりませぬ。殿は天地の大義に従つて去就をお決め下さい。私の身はお案じなさいませんよう。いつも懐剣を持つており誓つて辱めは受けませぬ」と手紙を送っている。流石は武将の妻、素晴らしい覚悟ですね。

秀吉と政宗の家臣茂庭綱元が碁を打ち、負けた秀吉は褒美に側室のお種を茂庭に与えます。するとこのお種に心を動かした政宗は自分の側室として寵愛、香の前と呼び一男一女をもうけた

が世間体を考えてか男子は綱元の四男として育てられ、七歳の時亘理家に養子に行き、栗原郡高清水を政宗から与えられ、政宗の宗をもらつて亘理宗根。娘は原田宗資に嫁いで生んだのが原田甲斐。伊達騒動の悪役ですが、政宗の子という説も。秀吉でなく、家康が、

政宗の子と碁を打ち負けたので妊娠している側女を褒美に与えたという説もありよく似た話。碁が好きなのは家康です。名君といわれる豊後の大友宗麟も、家臣の美人の妻を何人も奪い、家中にひそかに批判する者も。キリシタン大名もこの道ばかりは別のようにです。

10年20年連れ添つた揚句、性格の不一致で離婚、これは名目でしょうね。縁あつて一緒になったんです。死ぬ時「キミと一緒に良かったよ」「あなたといたいしよで幸せでした」そんな夫婦でありたいですね。